



受難の主日(枝の主日)(マルコ 15:1-39)

言葉を尽くしてイエスの沈黙を説明するなら

受難の主日、イエスのご死去までの出来事を駆け足で辿ります。聖木曜日、聖金曜日の典礼に参加できない方は、特に今日の典礼を通して、私たちのために血の一滴まで流し尽くされたイエスの犠牲・奉献を思いましょう。そこから、この一週間私にできることは何か、考えてから生活に戻ることにはしましょう。

田平小教区の皆さんは、先週の連絡会で、復活の主日・日中までの説教を配布してもらえるようお願いしました。すでに目を通されている方もいるかも知れません。本日の朗読で、イエスが語られたのは最初と最後だけです。しかも、一切弁明をしないのです。

私たちの主は、なぜこうまで沈黙を守られたのか。イエスの沈黙の中に、復活への希望を見いだす。イエスの沈黙の中に、私たちも場所を見つけ出す。そんな十字架の道行が、私たちにも必要になってきます。

時折、物言わぬ沈黙が尊い価値を持つことがあります。東日本大震災から10年を迎えた3月11日に、特集番組のいくつかを見ました。その中に、すでに退職した似顔絵捜査官のドキュメンタリーがありました。この人の手にかかれば、それまで手がかりがなく暗礁に乗り上げていた事件が一気に解決する、そんな似顔絵を描く人物でした。

この元捜査官が震災の身元不明者を遺族にお返しする切り札として呼ばれたのです。痛みの激しい遺体や、完全に白骨化した頭から、本人の特徴を引き出して似顔絵を描きます。似顔絵が決め手になってたくさんの身元不明者を遺族に引き渡すことができました。今も、最後の一人まで遺族に引き渡そうと、一度描いた似顔絵も描き直して捜査に協力しています。そんな番組でした。

ご遺体は、何も語りませんが、元似顔絵捜査官だった人は、そのご遺体の声なき声を拾って、似顔絵に反映させていました。何も語らないはずの骨から、当時の姿を引き出す。そこに実際には声はなくても、正確に伝わる何かがあるのだと実感しました。「沈黙に聴く」ということでしょう。

イエスの十字架上の場面は、言葉で言い尽くせない神の計画の集大成です。それを言葉であれこれ説明する必要があったなら、イエスはいくらかでも説明を尽くしたでしょう。しかしイエスが選ばれたのは沈黙でした。人間的に考えれば、何も語らなければ誤解され、思いをねじ曲げられる恐れもあるのに、イエスは何も語らず、ご自身を十字架の上でさげました。

それは御父への信頼があったからです。「御父は、沈黙のうちに十字架上の救いのわざを正しく理解させてくださる。心配する必要は無い。」御父への絶対の信頼があったから、イエスは沈黙のうちにすべてを成し遂げたのです。

沈黙が私たちに教えていることは何でしょうか。それは私たちがイ

エスのように御父への信頼のうちに生きることです。私たちも、御父への信頼のうちに生きるなら、たくさん言葉よりも沈黙のほうが価値を持ってきます。言葉で弁明したくなる場所を、沈黙の中に留まることができます。御父が、私の沈黙の正しさを証明してくれるからです。

イエスは十字架の上から言葉で弁明しませんでした。御父が沈黙の正しさを証明してくれると信じました。そしてイエスは復活し、ご自身の正しさを証明してくださったのです。

イエスは私たちにも招いています。沈黙の中に、場所を見いだすこと。沈黙の中に、答えを見いだすこと。人間のどのような弁明よりも、神がそばにいて守ってくださる沈黙のほうが、はるかに力強く、信頼できるものです。イエスはそのことを十字架の上で証明されました。私たちは同じことを、それぞれの人生の上で証明するのです。

聖木曜日(ヨハネ 13:1-5)



聖木曜日 (ヨハネ 13:1-5)

どこまで互いに足を洗い合うことができるのか

聖木曜日、今年は新型コロナウイルスの影響を考慮して洗足式を中止しました。この最後の晩餐に行われたことは、主イエスの受難を前にして、生きて伝えることのできる最後の遺言です。互いに足を洗い合うこと、ご自分を食べ物として、弟子たちに与え尽くすこと、この両方に、生きて残すべき教えがすべて込められていたのです。

まず、最後の晩餐で残してくださった聖体の秘跡について考えましょう。主は私たちのために、聖体の秘跡と、そのための儀式を残していただきました。主が与えることのできるものの中で、最も尊いものを残していただきました。

いちばん大切なものを残す時、方法はいろいろ考えられたでしょう。その中で「人の命」に繋がる「食べ物」の形をイエスは選ばれました。しかも単純な食べ物ではなく、「イエスご自身」を食べ物として与えようとしたのです。

この説教を考える時に、ふと思い出したのは使徒言行録に記されている「ペトロ、ヤッファで幻を見る」という場面でした。ペトロがヤッファの町に近づいたころ、祈るために屋上に上がっていると我を忘れたようになり、幻を見ます。そこで神と対話する場面は以下の通りです。

「(ペトロは我を忘れたようになり) 天が開き、大きな布のような入れ物が、四隅でつるされて、地上に下りて来るのを見た。その中には、あらゆる獣、地を這うもの、空の鳥が入っていた。そして、『ペトロよ、身を起し、屠って食べなさい』と言う声がした。しかし、ペトロは言った。『主よ、とんでもないことです。清くない物、汚れた物は何一つ食べたことはありません。』すると、また声が聞こえてきた。『神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言うてはならない。』こういうことが三度あり、その入れ物は急に天に引き上げられた。」(使 10・10-16)

イエスは最後の晩餐でご自身を食べ物としてお与えになりました。

「取って食べなさい」と言われました。ただ、イエスご自身を食べるということは、いつも楽しいことばかり、口に甘いことばかりではないと思うのです。

できれば食べるのを避けたい。逃げようとする弱さを乗り越えて、イエス・キリストを食べて生き続ける。そのような生き方、証の生活を私たちは遺言として与えられたわけです。主が与えてくださった食べ物を、「主よとんでもないことです。これは食べられません」と拒まず、糧としていく。いつかそのような日が来ると考える時に、責任を伴う遺言であったことが分かります。

次に、イエスが弟子たちの足を洗う場面を考えてみましょう。「聖体の秘跡」が「儀式の形で与えられた愛の掟」だとすると、互いに足を洗い合うことは「儀式にとらわれない、その場で求められる愛の掟」と言えるでしょう。イエスが最後の晩さんで残してくださったのは、儀式

を伴う愛と、儀式を伴わない愛。どちらでもイエスの愛を残してくださいましたのです。

イエスが弟子たち全員の足を洗ったのであれば、イスカリオテのユダの足も洗ったこととなります。イエスはユダの心の中をご存知です。すでに裏切る考えが植え付けられていました。人間的に見れば、「何でこの人のために身をかがめなければならないのだ」と思っても不思議ではありません。

弟子たちにとっても、ユダが信用できないという思いがあったでしょう。12章6節では「彼は盗人であって、金入れを預かっているながら、その中身をごまかしていたからである」となっています。なぜこんな奴のために、先生が身をかがめなければならないのだ」という思いだったでしょう。

人にはお互い相性がありますから、理解できない人には心を開けません。また、人からガッカリさせられたことをいつまでも引きずって、その人のために身をかがめ、足を洗い合うことが受け入れられない場合もあります。イエスはきっと、将来そうしたことが起こることも織り込み済みで、「最後の晩さんの聖体の秘跡」をお定めになったのです。

ここに集まっている私たちは、最後の晩さんの中で与えられたものを、イエスからすべて受け取らなければなりません。「儀式の中での愛は受け取るけれども、儀式を伴わない愛はできない」とか、その反対も、イエスの遺言の片方だけで終わってしまうこととなります。

「これを取って食べなさい」「これを受けて飲みなさい」イエスの招きに、十分に応えられるように、このミサの中で恵みを願ってまいりましょう。

聖金曜日(ヨハネ 18:1-19:42)



聖金曜日 (ヨハネ 18:1-19:42)

イエスはなぜ沈黙のうちに死ぬのか

主の御受難を、ヨハネ福音書の朗読で迎えました。今年の典礼暦はB年ですから、黙想するためには受難の主日に朗読されたマルコ福音書第15章を用いたいと思います。

受難の主日で指摘したように、マルコ福音書の受難の朗読で、イエスは最初と最後の言葉だけしか記録されていません。沈黙の中に、救い主の私たちへの愛を見なければなりません。次第にすべてを奪われていく中に、救い主の私たちへの愛を見なければなりません。

葦の棒で頭を叩かれ、ひどい言葉で侮辱され、衣服を剥がされ、罪状書きが貼られた十字架にはりつけにされ、ののしられる。それらの姿の中に、救い主の私たちへの愛を見なければなりません。どうすればあれほどの惨めさの中に、神の愛を見ることができるのでしょうか。それはただ一つ、「沈黙によってのみ」見ることができるのだと思います。

昨年末、大分教区の教区長浜口末男司教様が亡くなりました。大神学生時代に上五島の大曾教会に浜口神父様がおられてたいへんお世話になったので、葬儀ミサに出席したかったのですが新型コロナウイルスの影響で叶いませんでした。たいへん慕われていた司教様でしたのでだれもが出席したかったはずです。

葬儀ミサに出席できなかつたので、平戸地区の司祭たちは同じ日、同じ時間に追悼ミサをささげました。そのミサの中で平戸地区長の山村神父様が次のような思い出を語ってくれました。「私山村神父がいちど命の危険にあった時、たいへん怖い思いをしたとその時のことを当時の浜口神父様に話したことがありました。すると浜口神父様は表情を変えずにこう諭してくださいました。」

「『山村神父様の覚悟はその程度か？司祭はすべて、司祭になった瞬間から、イエスのためにいつ命をささげてもよい。この覚悟ができていないといけない。』私山村神父は、浜口神父様の言葉を聞いて、深く心を打たれたのです。晩年浜口司教様がご自身の病気を誰にも一切知らせず、沈黙の中で最後まで命を燃やし尽くしたことも、かつての体験と重ねて納得できたのです」と話してくれました。浜口司教様は、教区民すべてのために、ご自身による沈黙のおささげで遺言を託されたのです。

このあと行われる十字架の礼拝で、布を剥いでいくしぐさがあります。すべてが失われる姿を現しています。今日、聖櫃には御聖体が収められていません。この祈りの家を聖なるものとしている御聖体も取り去られているのです。あらゆるものが取り去られて、何も残っていないのでしょうか。

そうではありません。私たちを救おうとされるイエスの愛は、決して奪われないのです。すべてを奪われているのは、沈黙によってイエスの愛を見るためです。この静けさの中に私たちもしばし身を置いて、沈黙の中で神の愛を確かめることにしましょう。



復活徹夜祭 (マルコ 16:1-7)

あなたは何に死んで、復活の神秘を掘り下げますか

主の復活おめでとうございます。B年マルコ福音書を頼りに、今年の復活の喜びまでの道を辿ってきました。四旬節第4主日あたりからしきりに触れてきたことですが、「沈黙を守るイエス」からも、栄光の姿を読み取る信者に成長する必要があります。

今年の学びを得るきっかけとして「教会の祈り」に目を向けたいと思います。司祭や奉献生活者が日頃から唱えているものに「教会の祈り(または時課の典礼)」というものがあります。日本語に翻訳されていますが、実は海外のもの比べると不完全です。日本語版は、一年中の季節を一冊で済ませようとした簡略版ですが、外国語版、たとえば英語版は四冊に分かれていて、待降節・年間主日①・四旬節と復活節・年間主日②となっています。

この半年、試みに海外の物を使っております。もちろん外国語ですからお祈りが完璧に理解できているわけではありませんが、日本語版では到底気付かなかった部分が見えます。英語版の教会の祈りで一つ取り上げると、「四旬節と復活節とは、離れがたく一つに結ばれている。いわば表裏一体なのだ」ということです。

教会の祈りの特徴は詩編をふんだんに唱えることです。毎日、朝の祈り・昼の祈り・晩の祈り・寝る前の祈りと唱え、更に読書の祈りも加わります。これらの祈りにふんだんに詩編が用いられているのです。

手元にあるこの「四旬節・復活節用」の、「読書の祈り」第一朗読を唱えながら、「へえ。こうなってるんだ」という気付きがありました。詩編を唱える前に先唱があるのですが、四旬節中に使う先唱と、復活節中に使う先唱とでは、「アレルヤ」が付くかつかないか、それだけしか違いがないのです。

日本語の教会の祈りですが、同じ「読書の祈り」の第一朗読に添えられている先唱は、例外を除いて残念ながら一年中同じ箇所を唱えています。四旬節と復活節が表裏一体であるということのを連想させる作りにはなっていません。今後、本来の姿、つまり四冊セットの完全版ができることを心から願っています。

さて教会の祈りの完全版が私に気付かせてくれたことは、「四旬節と復活節とは、離れがたく一つに結ばれている。表裏一体だ」ということでした。四旬節に唱えていた「読書の祈り第一朗読」に添えられている先唱に「アレルヤ」を付け加えるだけで、そのまま復活節の「読書の祈り第一朗読」に変身する。これは何を意味しているのだろうか。その答えを探し求めながら、四旬節の期間祈りを唱えていたのです。

そしてようやく、この原稿を用意する直前に答えらしきものが見えました。それが、先ほどから言っている「四旬節と復活節は、表裏一体なのかな」という思いでした。もう少し踏み込んで言うと、イエスの受難と復活は表裏一体だと、完全版の教会の祈りを唱えていて気付いたの

です。

もしこの仮定が的を射ているなら、私たちの日々の苦しみにも光が差します。誰でも何かしら体の不調があり、また病気を抱え、障害を抱えています。いっさい体の不調がない完璧な肉体をもつ人などまずいないでしょう。完璧な肉体をもつ人が仮にいたとしても、その人はきっと、僅かな体の不調を持つ人さえ理解できないかも知れません。

私は見た目には健康そうにしていますが、四種類の薬を服用しています。尿酸値を下げる薬、血中コレステロールを低下させる薬、更には血圧を下げる薬も服用しています。「薬を日頃から持ち歩く生活になったらもうおしまいだ」と、若い頃は本気で思っていました。

けれども今、薬を持ち歩く生活が日常になってみるとよく分かるのです。薬を服用している人の気持ちなど、何も気にしていなかった。自分が同じ立場になって、かつては「薬を何錠も飲む人の人生はもう終わっている」と思っていたけれど、そうではない。「その人生は終わっている」と決めてかかっていた生き方にいったん自分を置いて、初めて見える世界があるということです。

今なら、薬を飲み始めたという人に、こう言ってあげるでしょう。「ようこそ。」自分が、受け入れられないと言っていた状態に一旦死んでみて、人は初めて復活するのです。

イエスが先に、死と復活が切り離せないもの、表裏一体だと証明してくださいました。私たちもこれまで思い描いていた自分に死ぬことで、復活の栄光にあずかる者となれます。

どれだけ働いても疲れなかった人が急に倒れて入院し、退院して初めて仕事の量を考える人になる。一度死を味わったことで、その先の復活を体験できたのです。

神の使いも言っています。「さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおりに、そこでお目にかかれる』と。」(12・6) いろいろな思い込みに死ななければ、私たちはイエスが招く場所にたどり着けないのです。

復活の喜びをしみじみと味わうために、私たちは何かの形で死を味わうべきだと思います。故意に命を危険にさらす必要はありませんが、思い込みや偏見は、一度死ぬべき最上位のものです。今年も、復活の喜びを深く掘り下げる材料を探しましょう。私たちが更に一つ、何かに死ぬならば、そこで味わう苦痛や惨めさや沈黙を通して、復活の神秘をより深く学ぶことになるのです。